

提題：わたしたちは何を奪われているのか？

片岡龍

・「衆人ハ聖人ノ私法ノ為ニ真ヲ奪ハル。故ニ聖人ハ衆人ノ本真トモニ盗ム」¹

※「真」、「本真」とは？ cf.「本」＝生産物、「真」＝精神（全集⑧-134頁）？

cf.「生産の総量があがるという事と、県民大衆が幸福になるということは別問題です。六ヶ所が貧困なのは、工業がないことが原因ではなく、もっと基本的な民主主義の遅れが問題なんです。／…例えば、あのフジ製糖の問題です。数千人の農民にやったことのないビートの栽培をやらせ、そして突然引き上げた。あれが何を教えたか。／資本主義社会において、企業というものは、儲からないところには絶対に来ないということを、儲けるつもりで来ても、儲ける見込みがなければ絶対撤退するという原則を教えているのです。それをまた来るかと思って、「泥棒」をまるでお釈迦様かキリストのように信仰している。／安藤昌益は「不耕の民は民の虱なり」と言いました。血を吸うのではなく、生活や生命までも収奪しないと満足しないのが、独占資本の本質なのです。／この問題ですよ。根を正せば地域の貧困でしょうが、歴史的にも人間的にも意識の貧困です。／…すでに住民の心を取りかえしのつかないところまで荒廃させてしまっている」²

「このむつ小川原開発の運動は、この訴訟も含めて、住民を守る、或は自然を守るということでもあるが、実は、青森県が「現代」になるための最後の文化運動だと思う」³

・真＝「活真」

日常的な夫婦の性の営みと睡眠、家庭における衣食と、それを産み出す生業と休息。誰から教えられたわけでもなく、人間が自発的に行ってきた平凡な暮らし。…このような人間の生活と自然の運行を貫いている根源的活動力を、昌益は「(土) 活真」と呼ぶ。「土」というのは、植物等が土に帰って、ふたたび芽を出すことなどからの連想であろう。…昌益は「活真」を「イキテマコト」と読ませる。生命の真実性とでも訳せばよいだろうか。⁴

・「求メザルニ予ガ胸中ノ自然真、自リ之レヲ患ヒテ、今此ノ久失ヲ糺シテ自然ノ真道ヲ見ハス」⁵

書芸家、造形家の宇山博明（1913-97）…は「書は造形である」とし、自分にとって書芸とは「命を書く、自分を書く、今を書くことだ」と語り、次のように述べる。

わたしの造形は、作るのではない。いのちそのものが形になるのだ。見えないいのちが見えるいのちに転化する。これがわたしの造形なのだ。

昌益は自身の著述活動を、宇山同様、見えない生命の真実（「活真」）を「見えるいのちに転化する」活動と考えていたと思われる。⁴

※「本」＝米穀、「真」＝表現的生命⁶

¹ 『統道真伝』（農山漁村文化協会版『安藤昌益全集』第8巻、134頁）。

² 「米内山さんから聞く」1989、『米内山義一郎の思想と軌跡：時を超えて…：むつ小川原開発との闘い』むつ・小川原巨大開発に反対し米内山訴訟を支援する会、1999。

³ 「人が黙すならば石が叫ぶだろう」-市民集会での米内山さんの講演録- 1980、前掲書。

⁴ 片岡龍「日本の「周辺」から見た東アジアの平和と宗教—安藤昌益の平和論を中心に—」近刊

⁵ 『統道真伝』（農山漁村文化協会版『安藤昌益全集』第9巻、64頁）

⁶ 「木村にとって、「表現」するのは個的主体ではない。[…][表現的生命]が、表現するのである」（西村拓生「大西正倫著『表現的生命の教育哲学 木村素衛の教育思想』、『教育学研究』79-1、2012）。「木村によれば、自然はそれ自身表現性をもつものとして、自然の探求者に語りかけ、彼をして自然への問いを発すべく唆し促してくるのである」（村瀬裕也「解説」、木村素衛『美の形成』こぶし書房、2000）。